

それ故に、氏は尊皇と愛郷との熱意から、早くより宸翰の蒐集・保存、それによつて歴代御聖德奉仰を念とせられた。今やこの一部を印影に附し、親戚知友に頒ち、以て皆人とその素懐を俱にせんとせられたものが本書である。

收められる所、伏見天皇宸翰廣澤切、後小松天皇宸翰御消息以下室町時代から江戸初期に互れる歴代のものが多く、曼殊院門跡に宛てられたものが大部分であるから、その尙藏された所も大體に見當が付き、それだけ史料としての價值高きものがあらう。

皇紀二千六百年の佳歳に當り、かゝる意義深き秘寶の公開された事だけでも結構な事であるが、更に、これらの史料によつて皇運隆昌の御次第を偲び奉る事が出来るのは、洵に光榮であると思ふ。(非賣品)(中村直勝)

江南文化開發史

岡崎文夫・池田靜夫著

支那江南の文化が宋代に至つて急速に發展したのは、「この地方に於ける農業生産力の發達」に基因する。従つて該地の「水利水運の發達はその(江南開發の)最も重要な條件の一」であるとの見解に基き、「文獻上よりの推定を實地に見て確めんとする」必要を痛感した岡崎博士及び佐々學士は昭和十一年夏、文部省學術振興會の命を受け、江南水運の状態を視察して歸學し、佐々學士助手) 沢職のため、之に代る池田助手と共に、主として江南の水利水運問題の中心たる松江(吳松江)の研究を大成し、「總説」及び「要

略」に於て博士がその平生研究されたる結果を發表し、「別説」に於て、池田學士の諸論文を一括して合著として世に問うた勞作がこの江南文化開發史―その地理的基礎研究―である。

第一編「總説」に於て博士は先づ「江南」の定義を與へて「南京を中心とする地方」に「南部江蘇及び浙江の一部を含む」地方として次に古代より唐代に及ぶ江南の湖澤と河流との變遷を述べ、豊富なる水流を運河に利用する交通政策と、治田の爲めの灌漑政策とが古くから採用されたが、「然し戰國以來國家の運河政策はむしろ農田の開發よりも漕運の爲めの交通路が重視された事に」注意された。第二編「別説」に於いて池田氏の第一章「唐宋時代の三江學説の理解」は禹貢に見ゆる三江の説が唐宋時代に於いて、學説の歴史より見て異色のあつた事を指摘し、その原因に就いて興味ある一説を展開し、結局三江は太湖下流の松江上の三江口説をとるが、これが宋代、時に南宋時代に於いて顯揚されたのはこの地方の農業の發達と密接なつながりを持つてみた結論する。次いで第二章「銀林河考」に於ては太湖の水源としての銀林河(中江)を繞つて、北宋時代に對立した五製復活論派(水利治田論派)と圩田掘唱派(交通論派)との所論を紹介し、唐宋時代時代に太湖は上流より長江の流れを受けなくなつた事實を指摘し、これが太湖に及ぼす影響と、更に太湖周邊の地域がそれによつて受ける影響とに注目し徽宗時代の水運問題を論じた後、南宋時代は首都を臨安に奠めた關係上、銀林河利用の問題は水學として愈々發展し、結局銀林河開發は實現しなかつたが、銀林河は長江流域と臨安と

の連絡水路として最も便利であつた、「四川廣南から荊湖江淮諸路の船貨はこの河に出た事は殆ど之を疑ひ得ない」とする。第三章「宋代の松江とその變遷」に於いては、古來太湖の水が海に出る最短徑路として松江はその江道は殆ど變つてゐないが、宋以前あまり問題とされなかつた本河も、水利の問題が國民社會の經濟生活に重要な地位を占める様になつて遽に世の注意を集めた事を指摘し、松江を繞る幾多の論議に基いて松江江道の變遷、流量の變化等の問題を詳細に検討した。第四章「熙寧の農政——特に農田水利——と二郷の水學」は北宋初期の農田政策は單に「農民の負擔の均衡乃至輕減」に重きを置かれたが、仁宗神宗以後はそれ以外「大いに水利を興修して農業生産力を増さん」とする新しき傾向が加はつて來た。こゝに熙寧農政の重大な意義があるとし、王安石の措置三司條例司の仕事も農田水利を、その重要な課題の一つとしてゐた事を述べ、熙寧二年十一月の農田利害條約をあげて、熙寧の政府が「周到精密なる企画により國家的な事業として農田水利の開發統制に乗出した」事を論證し、王安石と二郷（鄉壘・鄉僑父子）の水學との關係を明らかにせんと試みた示唆深い研究である。第五章「歸有光の水學」に於いては明代の松江は淤塞して了つたため水利政策上顧みられざるに至り、寧ろ白茆、黃浦、劉河港等の經營が主なる政策の對象となるが、歸有光は「松江經營一本槍」で、淤塞した松江と、これを繞るクリークを立て直すべきことを力説したと説く。

第三編「要略」は岡崎博士が「別編」に於ける池田氏の研究事項が

外岐に互つてゐる爲、問題の重點を明かにするため筆を執り、併せて博士自身の考を附加せられたものである。

以上は本書の簡單なる内容紹介であるが、分量の點から言へば岡崎博士の親しく筆を執られた第一編「總說」と第三編「要略」は合計五十四頁——全體の一割五分——に過ぎず池田氏の「別說」は二百八十三頁で全體の八割五分を占めてゐる。従つて「別說」たる池田氏の諸研究が主と考へられるから、池田氏の論說を先きに見ると、同氏は大學の卒業論文に既に「宋代の杭州」を論じ、「支那人文地理史の完成を終世の目的」とする學徒で、その論致は何れも新しい分野を開拓せんとしてゐる。數篇の論文中、「熙寧の農政と二郷の水學」に於いて同氏の今後の研究方針と目標とが最もよく現はれてゐると思ふが、本篇は確かに興味深い少くとも最も見應へがする。たゞ二郷と王安石との關係の論證が少しく手薄であるかの如き感を抱かしめるが、之は大した問題ではない。併し、本書所收の諸論文が多くかつて一度、雜誌に發表されたものと大差なく、そこに一脈の物足りなさを感じず。「江南文化開發史」として一冊に纏めて上梓される以上、その後の研究の成果を遠慮なく發表されるか、然らずんばもつと内容をくだいて書いてはしかつた。岡崎博士の「要略」がなければ危く問題の重心が見失はれるであらう。尤も之も萬事岡崎博士の指導によつて決定された方針ではあらうが。

「總說」及び「要略」に於ける岡崎博士の論致は老巧そのもので、池田學士の足らざるを補つて餘すところなく、資料の取扱ひ、推

論の運びなど、最早や批評の限りではない。一例を挙げれば池田學士が宋に至つて江南の水學が俄然興起するが、その機運が、熙寧の新政によつて促成されたと主張したのに博士が裏打ちをされて、然しそれと共に自然に温蔵されたる社會的狀勢が其の背後の基礎的條件として嚴存して居る」事を強調された點(要略第一章)等實に心憎いものがある。また「宋代に起つた水利學が元明に繼承され、學は實行に選され、實行上の結果が學説を訂正しつゝ、江南開發の機運、從つて長江下流域の人文を進めた事實を論述されたるが如き(要略第三章)茲に「江南開發史」の總決算と全貌とが鮮やかに示され、池田氏の難解なる諸論文が一氣に解決された感がある。

本書に對する註文としては全體として内容をもう少し安易に説いて貰ひたかつたこと、地圖や略圖をもつと挿入して讀み易くしてはしかつたと思ふ。でないと學術専門の論文集と言つた感が深い。

揚子江下流域の地勢の上に、重大なる作用と牽制力とをもつ松江と太湖、そしてデルタ、そのデルタの上に發生すべき生産力が、歴史上、宋代より最も活潑に躍動を開始したとすることは何人もが異存なからう。嘗つて故桑原博士が「晋室の南渡と南方の開發」(大正三ノ歴史)より觀たる南支那の開發(大正八等の一世の名論文を發表され、晋の南遷によつて北支那の文化が長江流域に移動され、扶植された事を論證されたが、その桑原博士の門下出身たる岡崎博士が近世における江南の開發を研究され、その年來の

勞作を今茲に發表されると言ふ事は奇しき因縁でなくて何であらう。(昭和十五年、弘文堂、三四八〇錢)〔荒木敏一〕

開封と杭州

支那歴史地理叢書第七

會我部靜雄著

開封と杭州とが支那歴史上特に有名となつたのは宋時代からであつて、それは之等兩都市が宋の首都となつたが爲である。宋はかの靖康の難を境にして北宋、南宋に區別されるが、開封、杭州は夫々北宋、南宋の首都として前古未曾有の繁榮を呈した。本書は主として當時の開封、杭州の有様を敘し、兼ねて之等兩都市が今日に至る迄如何なる變遷を遂げて來たかを述べたものである。

本書は全體を開封と杭州との二部に分ち、更にその各々を幾つかの節に分けて説いてゐる。以下本文に從つて開封、杭州の順にその内容を簡単に紹介する事とする。

〔開封〕一は「開封の概観」である。こゝでは主として開封の地形と沿革とを述べ、特にこの地が宋の首都に奠められるに至つた事情を縷説してゐる。周から唐迄の支那歴代の首都は概ね兩谷關を中心として、西、長安附近か、東、洛陽附近かに決つてゐた。之は地勢の堅固なるに據つたのであるが、この開封の地は平原に位し、水陸交通至便の所である。宋がかゝる所に都を奠めたのは時勢の變轉に基づくもので、近代的首都が地勢の堅固なるよりも交通の至便なるをよりよく要求したが爲で、尙開封が宋の首都に適